Hermann Kant の „Kormoran“ を巡って

酒　井　　府

(I)

Hermann Kant は 1990 年に至る迄のその半生記とも言える回想記をベルリンの壁崩壊、及び DDR 政権崩壊以前の 1989 年 2 月に書き始め、東西ドイツ統一以降に書き終えて、その回想記に、映画やテレビのドラマ、記録物の最後に流れる字幕を意味する „Abspann“ と言う題名を冠した。此の作品は Hermann Kant を理解する上で、非常に興味深い物であり、私は既にそれに関しては論じてきた。[1)]

それに続けて彼が 1994 年に書き下ろしたのが此の長編小説である。此の作品を書くきっかけとなったのは、„Abspann“ の場合と同様にやはり母親の言葉であった。彼は作品の扉の前頁で次の様に書いている。「1989 年秋、私の母は歴史の進行、文学の状況、彼女の息子達の営みを次の様な文章で纏めた。『お前達の為に、人は動物に就いて物語を書けば良かったのに !』――私はそれを試みたが、鳥の名前を持った小説の主人公の域を超える事はなかった。つまり、Brehm（筆者注：ドイツの著名な動物学者）によれば、何はともあれ、温和とは言えず、陰険で冷やかしが好きな或る鳥（筆者注：Kormoran = 海鵜）の名の主人公である。」続けて Kant は此の小説に就いて次の様に述べている。「そして何はともあれ、あらゆる生とあらゆる死に就いて語る或る小説を書いたのである。――『文学カルテット』誌が私の „Abspann“ を論じた時、此の作品の著者に就いて『私は此の男に不安を抱いている。此の男は今日でも危険である。それ故、人々は注意せねばならぬ !』と称した。――私は実際には好ましく、肝の小さい事を証明する為にも私は “Kormoran” と言う小説を書いたのだ。」[2)]

一貫して DDR 体制擁護の確信犯と見られて来た、旧 DDR 作家同盟議長

に対する批判が相変わらず強い事の証明と言えるが、私はその様な Kant の人物像を否定する 物として „Apspann“ を解説し、論じて来たつもりであるが、[3] それはさておき、„Kormoran“ 自体を論じて行きたい。

(II)

主人公 Paul-Martin Kormoran は 1992 年 6 月現在六十六歳の評論家であり、1926 年 6 月生まれの Kant 自身を髣髴させるが、今は地震直後の様な老朽化の激しい別荘に住んでおり、6 月の昼前、そのテラスでの場面から此の作品は始まる。彼は四年前夏に此処に移住して来たのであり、三年前には苦労し、二年前には心臓の手術を受け、昨年来他の人々に此の別荘は囲まれる様になり、今は此処に留まらない事が確実であった。此の山荘も Kormoran 家もそれ程、相互効果を受けなかったのである。三年前の苦労とは統一前後の事であろう。ますます作家 Kant と重なるのである。裂け目だらけの家の前、毀れ掛かったテラス上の年老いた人間と彼は自分自身の事を考えるが、それを非常にひどい事とは感じなかった。死んだ人間よりましであり、存在する事は存在した事よりましだからだ。しかしここ数年、彼が気にしているのは、或る会見者の年を取る事とはと言う質問を老いと若さの関係と誤って捉え、誤って答えた事である。故に彼は再度の質問を望み、「年を取るのは誕生の瞬間から、おそらく五十歳台の初め迄であり、それからは老いるのであり、年を取る事は快適であるが、老いる事はただ酷い事である。」[4] と言う答えを用意していたが、その会見者がその質問を避ける状況に自分が落ち込んだと思い、Paul-Martin Kormoran と言う人物への公の関心の一般的後退を見る。統一後の Kant に対する状況を示唆しているのであろう。主人公 Kormoran は編集者としての職業生活三十歳代の十年間を思い出すと満悦感を抱くのであり、当時は彼と時間の経過の間にどんな関係もないかの様に見えたのであり、写真を見ても容貌、体型に変化を見なかったのである。彼は五十年代末から六十年代初めのベルリンでの編集者、或いは六十六歳の誕生日から数えて丁度、人生の半ばに戻る 1959 年半ばの編集者の仕事に満足していた。その 59 年を緊張緩和の年だと見た或

るコラムニストの記事を読んだ今日の彼はそれを否定し、その例として、59 年当初のキューバ革命、月の周囲へのソ連人工衛星打ち上げ、USA 国家予算への 62.3 パーセントの軍事予算計上、ドゴールの核実験宣言、スターファイト三百機購入、原子力潜水艦のポラリスロケット装備、コンゴでの闘い、西ベルリン警察によるドイツ国有鉄道の東独国旗七十旗押収を挙げる。一方彼はその年のフルシチョフとアイゼンハワーの動きやその他の上述の事件に逆行する出来事も忘れない。彼はまたその年の三十三回目の誕生日に初演された彼の最初のオペラ『致命的な望み』（Die tödlichen Wünsche）とそれに対する新聞評のタイトルが彼の人生にとって最上の時を駄目にした暗い予感を生み出した事を思い出した。これからの人生に就いて考える誕生日と言う時を。六月半ばを楽しむ代わりに、人生の半ばを考える事もなく、三十三歳になった事を享受する代わりに、冷戦の中の編集者として冷戦の首都で激しく生きる代わりに、彼は激しく死を考えてしまい、三十四歳には残念ながらならないであろうと世界に知らせたのである。しかし彼はその倍の年齢を生きてきたのであり、暗い顔付きはそれ程変わらなかったが、死は現実性を帯びてきた。あの当時、分別があると言われた彼にはもはやその言葉が当て嵌まらないと彼は今は考えている。

六十六歳の今、彼は庭の境目で何時も傾いだ籐椅子に座り、彼と彼の妻 Änne の会話に関心を寄せ、そうでない時には Frankfurter Allgemeine 紙を読んでいる隣の Birchel 婦人を目にし、その裏庭へその婦人を此の地域の主要人物と見なしている事を示す為に、太った郵便配達人 Blauspanner が先ずやって来る。彼は Kormoran の六十六歳の誕生日への祝電を伝え、テラスへ招待される。彼はそこで六十五歳は以前は旅行をする、今日は年金支給の記念すべき節目の誕生日なのに、何故、六十六歳の誕生日にとりわけ多くの祝電が来たのか Kormoran にその理由を尋ね、それを読み上げる。Kormoran は自分が生きている事だと答える。その祝電の一つは新生を祝い、更なる二十年間の長命を望み、別の一つは人口的な心臓の弁（Klappen）が保たれる（halten）限り、貴方の口（Ihre Klappe）は閉じない（nicht halten）様に（発言は控えない様に）、「それを、親愛なる Paul-Martin、蠅共を二発で（mit zwei Klap-

pen）叩き潰す事だ！　と私は言うのだ。」[5] と言う国内情勢に関するウィットであった。それは外科医 Felix Hassel からの電報であり、場合によっては来ることを示唆していた。そこで二人の会話が進展する。更に隣人の Birchel 婦人と Blauspanner の間にも会話が生まれ、彼女は昨年は Kormoran の誕生日が新聞に取り上げられたのに今回はそれがない事に触れる。その隣人の意図的な発言に Kormoran は寛容に応じ、六十六歳の誕生日に就いては何処にも記事は載らないと答え、次の彼に就いての個人的事柄は黒枠の中の記事だろうと述べる。彼等の会話に Kormoran 夫人 Änne が加わり、やがて、1990 年 6 月 14 日の六十四歳の誕生日に彼の心臓の手術が行われ、Felix Hassel により二つの人工弁（küstliche Herzklappen）が取り付けられ、彼が更に二年生き延びた事が明らかになる。それ故に多くの祝電が来たわけである。H. Kant は 1926 年 6 月 14 日生まれており、その点で此の主人公と重なるわけである。

興味深い事は三人の対話の中で、統一後顕在化した旧 DDR に於ける公共の財産問題、財産返還請求、不動産登記簿記入、旧所有者達による土地獲得等が話題になり、それらのテーマが今日タブーと見なされている事が語られ、更なるタブーとは何かと話しが展開し、自由主義的・民主主義的土地の処理、財政状況と言う歯痛、弁護士や牧師の活躍、東西の相違する見解の手短な処理、それらが歴史的転換と言われたと Kormoran が語る事である。此処には確実に Kant 自身の立場が反映し、『文学カルテット』誌の評者が彼に不安を抱き、彼を今日でも危険であると断じた所以であろう。[6] 続けてタブーが挙げられた所で電話が鳴り、Kormoran にはそれが聞こえず、彼の生まれながらの聴力の欠陥が明らかになる。慢性的な中耳炎と宣言され、分泌物と痛さの叫びを伴い、幼少時代、学校時代も変わらず、人生とはこう言うものだと彼は思い、とりわけ夜に痛み、それに対する薬剤処方も痛みとなった。彼はドイツの若者に頭から水に飛び込む事を期待し、診断書を口実と見なす水泳の教師や、他のドイツの若者や少女達との関係に悩んだ。しかし彼の兵士時代には、砲兵隊、迫撃砲、装甲砲塔に於いては難聴は問題とならなかったし、軍隊や兵営では全て大声で語られるので、難聴は長所とさえなり得たし、カービン銃の側でもそう

であった。命令者の言葉を常に理解したが、その様な状況も平和が訪れると一変し、ラジオでも、電話でも常に小声で語られ、パン屋の売り子の言葉は唇の動きで読みとったのだ。あの著名な Ludwig Renn も使用した補聴器の事も考えたが、長いこと拒否した末、結局使用したが、後ろの音は明瞭に伝えたが、前方の音には役立たず、相手との対話の際には音声を聞き取る為に、むしろ横を向かなければならず、会話は成立しなかった。その他補聴器の様々な欠陥が語られる。その結果、彼は非社交的になり、隠遁したと言われ、撃退されたとさえ言われ兼ねず、「彼の六十六歳の誕生日に Paul-Martin Kormoran は一人の撃退された男であった。」[7] と Kant は書いている。

Kormoran が電話に出ている間、Änne 夫人と Blauspanner の間に話しが進展し、誰が Kormoran の六十六歳の誕生日である今日、やって来るのかが会話の対象になり、彼女は更に郵便配達人に、此の日の内に更に郵便が届いたら、また来てくれるか尋ね、承諾を得る。しかし Kormoran が戻って来た時、郵便配達人はちょうどテラスの机上にあった祝電諸共、全ての郵便物を郵便袋に入れ、持ち帰ってしまい、Kormoran は電報を探し求める。彼の妻は彼の顔色から、誰かが彼を電話で怒らしたのかと尋ね、大儀そうに椅子に腰を下ろした彼は、彼を怒らせはしなかったが、いらいらさせ、唖然とさせたと語る。その相手は作家 Stegemann であり、左官屋が来るので、彼の所へ来られないと連絡して来たのだ。日曜日に左官屋とは、と彼はその口実に疑問を抱く。その Stegemann は社会主義的な作家であり、誰にも判る作家と評価され、最高の言葉遊びの為に真実を見捨てたりはしない作家と見なされており、彼は民衆の声に耳を傾け、その政府に目を配った。Paul-Martin Kormoran は Stegemann を誰のことも傷つけたりしない、その素材をモデル小説に使用したりしない作家と見なし、探し求める読者の側に立つ信頼の置ける詩人であり、非常口を持つ多数の小説の創作者と評価した。その評価の直後に彼に会った Stegemann は、「非常口とは、へぼ批評家め！」とは言ったが、悪く取ったのではなく、彼の誕生日毎に訪ねて来て新作を持って来たのだ。Kormoran はそれを熱心に読んだが、あの社会的転換期（Wende）が小説家 Stegemann と

批評家 Kormoran の社会的交流にも転換期（Wende）をもたらしたと今は思うのである。ドイツ統一と言う歴史的転換期に対する Kant の感慨が此処に見られる。

Kormoran は彼の老朽化した家屋が必要とし、Stegemann の所に来ていると言う左官屋の事を話題にしようとするが、話のきっかけを思案している隣人の女性を見て、彼は話題を消え失せた電報へ転じ、先程、彼が家の中に持っていったと主張する女医の妻 Änne とそれを否定する彼との間に齟齬が生じ、二人の対話は彼の欠陥なのかだらしなさなのかと言う話に展開する。彼は欠陥でないとしたらと不安になり、Änne は何時の日か彼が取り戻せない物を失う事を予言する。彼は大手術と言う過去に遡った予言だと解釈し、調和の思考を失う事を恐れる。年老いた人生への彼の感慨である。しかし彼女は彼が大手術後二年目に迎えた特別な誕生日が重要であると考え、更に生きる為に、彼の調和の思考こそ、彼にとってのノアの箱船、つまりユートピアとヒューマニティーとエネルギーと言う兄弟の様な三者の救いだと答え、彼は穏やかな悪魔を夢見たのだと述べる。それに対し彼は荒々しい天使と言う言葉を使い、その言葉が気に入り、その使用性を考えるが、話題を郵便物へ戻し、郵便配達人が持ち帰ったのかと立腹して尋ね、Änne は彼が気付いたら電報を持って来るだろうと応える。その事が二人の話題となっている最中に再び電話が鳴り彼は家の中へ行く。此処で Änne と Birchel 婦人の間で隣人同士として、お互いの騒音の事が話題となり、後者が連邦国防軍の軍楽隊に触れた時、「連邦国防軍は東ベルリンの楓の植林地域住民にとって例えば――とっくに現実となっていたが、長いことまだ思考となっていなかった。」[8] と言う前者の感慨が述べられており、それは統一直後の Kant のみならず、旧 DDR 民衆の感慨であると言えよう。後者はその後、Kormoran がまだ幾たび大晦日や楽しい事を迎えるのか話題にするが、物語は前者と再び屋内より戻ってきた Kormoran との対話になり、三度目の電話で、彼はまた屋内へ行く。

彼女は此の三年間、かなり草臥れ果てたのであり、その彼女を、彼がナチス政権下、ピレネー山脈を越えて亡命した Heinrich Mann を手助けしたその

夫人に比肩した事を彼女は想起する。あの転換期とそれに続くこの三年間は無血に進行したが、彼女の経験から彼女は一つの公理を引き出し、それを彼はÄnne の第一法則と呼んだのである。それは「あらゆる悪の総計は同じ侭である」[9] であり、その例として、死刑の判決に代わる度々の有罪判決、時たまの発砲命令に代わる百回にも上る支払い命令、強奪に代わる料金規定、重罪裁判に代わる執行吏、内乱に代わる財産返還権等々、ベルリンの壁崩壊以前と以後の旧東ドイツ国民に対する重圧が挙げられる。此処にも東ドイツ体制擁護の確信犯と見られた Kant の思考が反映しており、それは Kormoran が資本主義の下では起こりうる貧しさの中での勉学を拒否する姿勢、ガソリンの値上がりに対する批判、財務局は市民国家の盾でもあり、剣でもあると言う資本主義批判の彼の言にも表れている。三度電話より Kormoran が戻り、やはり郵便配達人 Blauspanner が電報を持って行った事が判明した後、彼と彼女の間で彼が後何年持ち堪えるかの話になる。様々な主張の後、彼は八年の結論を出す。

(III)

そこへ Änne の妹 Ilse の夫 Herbert Henkler が彼等を訪ねて来る。Kormoran は六十台初期の彼に直方体と言うあだ名を付けたがそれは彼の四角い体型の故と言うより、シャンとした真っ直ぐな姿勢で、簡潔にあからさまに話をする彼の性格の故であった。嘗ての十メーター飛び板飛び込みの選手として、ふっくらした女性達のアイドルであり、面倒を起こす人間で、国家防衛評議会の中佐を務め、護衛の役割から今は環境保護に全身全霊で取り組んでいる彼は、並の実情は心得ており、逞しく、粗野で要領がよく、その彼を、声が大きく、独りよがりで抜け目なく実用的な男であると Kormoran は見ている。Kormoran と彼の間の対話は順調に進行するが、Kormoran がその対話の中で、街角の標識が短い言葉で新しい状況を説明する西側の方式を羨ましく思う一方、「緊張は禁止、興奮は禁止、並の生活が私には必要であろうと医者は言う。私はその男に答えたのだ。並の生活と言われても、私は今、間違った国に住んでいる。」[10] と、Herbert に語る所に Kormoran の言葉を借りての Kant の統一

ドイツへの複雑な感情が伺える。

Kormoran が四度目の電話でテラスを離れた後、Änne と Herbert の間で交わされる会話は敵対的な物となる。前者が彼女の妹 Ilse に対する後者の暴力的な姿勢を批判したのに対し、後者は Ilse の多弁を防ぐ為で、しかも Ilse が Kormoran の千ドルもする高価で、チタニウムや高度に重合された炭素から出来ている人工弁を話題にし、彼の死後それがどうなるか主張した故であると抗弁する。更に、何故今日、彼の妻が来ないのかと Herbert に尋ねた Änne に彼は Ilse が此処最近、日曜日に、月曜日の新聞に掲載される報道を前もって知るためにハンブルクから来た男のジャーナリストに会っているからだと述べ、「夫婦関係とは、各人が一方の口実への権利を尊重する限り完全であると私は思う。」[11] と語り、彼女の不倫を示唆する。東ドイツで良く聞かれた状況である。話は二人の間で、夫婦関係、倫理と権利を巡って更に進展するが、彼女はその様な経過を終わらせる為にベランダのドアの所へ行き、家の中に向かって何か起きたのかと叫び、その場を去る。

そこへ訪ねてきたのは旧副大臣の Horst Schluziak とその妻 Grit である。勿論 Kormoran の誕生日を祝う為である。二人の間には妻が腕にはめていた時計に彼が覚えがなかった故に些かの諍いが起こるが、彼は文化がその批評に多くを負っている文化批評家にお祝いを言うためにやって来たと述べ、文学のみならず、文化の様々な面への Kormoran の多面的な批評を賞賛する。しかし、Herbert の「君は彼を我等の時代にもその様に評価したのか ?」の問いに対し、彼は「我等の時代？　我々は君の時代に就いて、または私の時代に就いて話しをするのか ?」と答え、前者は「私の、君の、彼女の、彼の時代さ！　我等の時代さ！　我々が何が問題であったかを決めていた時代さ」と反応し、今度は Grit が「何が問題であったか我々が言う事が許された状況が、何時あったと言うのですか？　貴方の歴史的知識に与らせてください、私は知りたいのです。或いは貴方は恐らくは私達全員の場合を言っているのではないのですか？　貴方は真面目に貴方の国家防衛評議会の場合を、とりわけ省や、その事に就いてそしてそれへの貴方の関係に就いて人がもちろんやっと幾らか後に

なって知った悪名高い中央官庁の場合を言っているのですか？」[12] と応ずる。此処には転換期以前の旧 DDR 時代に於ける三者の立場とそれへの三者の評価が見られ、非常に興味深い。Kant の複雑な心境は「我等の時代」と言う主張にも、Grit の批判的言葉にも反映しているように私には思える。また「悪名高い中央官庁」とは国家公安局（Stasi）の事であろうか?続けて彼女はその批判の矛先を夫の Horst へ向けるのだがそれは正に日常的な事柄に関する物で、高度な政治的な事から、日常的な事への批判の転換を Herbert は皮肉を込めて揶揄し、Horst との間に皮肉な応酬が生ずるが、Änne がベランダへ戻り Kormoran へ来客を告げ、期待して彼も戻って来る。Kormoran は歓迎し、Schluziak 夫妻に敢えて何故来たのかと尋ねる。単なる偶然だと夫は述べ、妻 Grit は純粋な合法性だと答え、転換期の後、現在の状況になって以来、夫の引退と彼女の融通の利く仕事の時間の結果、二人で一緒に朝食を取れる様になり、夫が朝食の際に古いメモ帳を読み始め、五年前の日々の事を思い出し、今日と言う日の記入を思い出したと説明する。それに対し Herbert は評価の高かった批評家 Kormoran 就いて、それ以前の年月に於ける記入と評価がない事に異議を唱える。更に現在は彼等にとって何の意味もないのか、そうだとしたら現実逃避だと批判する。夫妻は現実逃避とは反対の事だと反論し、Grit は「感覚の鋭さが問題なのです。我々は新しい現実に対する我々の感覚を鋭くしているのです。我々は我々の一昨年と言う偉大な年を今日起こっている事と比べることでそうしているのです。」[13] と語る。DDR 知識人達の転換期以降の複雑な感慨が此処にも見られる。

Herbert が何故一昨年なのか？　五年前の 1987 年以降にも 1988 年 1989 年があったではないかと主張するのに対し、Horst は 1988 年は腐っていて、1989 年は臭かっただけで、品位のない死の苦しみで、相応しくない人物への個人崇拝があったと述べ、1988 年、1989 年にかけてのロシヤでのペレストロイカ、ライプツィヒへのオリンピック招致運動に触れ、DDR 難民へのハンガリー西側国境に出来た穴（国境開放）で我々は駄目になったと語る。彼はそれを歴史上多分、或る財政上の裂け目を（注：西側の援助を期待してハンガリーが）

埋めた最初の裂け目と言い、魔術で、穴と言う解決不能の課題だと述べ、DDR 国民が嘗てのオーストリア・ハンガリー帝国にして王国の国境から抜け出た時、我々が常に口にしてきた社会主義インターナショナリズムを見る事が出来たと痛烈なアイロニーを言う。彼はゴルバチョフにも言及した後、1989 年と言う転換期に就いてこれ以上触れたくないと話を止める。

Kant が続けて「人々はしばし黙って座っていた。察する所 Birchel 婦人を除いて、それぞれが半ば他の者にとって、DDR と言う国の終わりが何であったのか知っていた。そしてそれぞれが自分の今日の姿勢が完全には当時の姿勢に相応していなかったと言う事も知っていた。故意にはお互いに或いは自分自身を欺いてはいなかった、そうではなく恥じらいから、怒りから、意気地なさからも、同様に始まりつつある絶望からである。」[14] と書いているのを読むと、私はそこに彼の、転換期直後のかなりの DDR 旧市民の、余りある心情を見る思いから免れず、彼等の姿勢に左祖せざるを得ない。

例えば Änne Kormoran の場合はと、彼女の事が述べられている。彼女は転換期には四十歳で、DDR 建国記念日と誕生日が同じで、それまでは神経を苛立たされていた。彼女は、微賤の生まれである故に庶民の国に忠誠で、抗議をした事もあるがそれを支持し、ナチに反対した告白教会とナチの嫌がらせを研究してきたプロテスタント教会史家 Eichhorn の娘で、その娘が DDR で学び、学位を得た故に彼は DDR に忠誠で感謝していた。彼女の専門領域が肛門からの体腔内検査と言う、敬虔な Fritz-Georg Eichhorn にとっては口にしたくない領域であったにせよ。その彼女は 89 年以前も、89 年も、それ以降も、どんな場合にも護って行こうとした必死の寛容さが薄れてきたのを感じ、最近は Kormoran との再婚にも疑問を感じていた。

上述の沈黙を破ったのは Grit Schluziak であり、彼女が 1987 年を頂点と評価したのに対し Henkler は「言わせて貰えば、それはくだらぬノスタルジーだ。それはすんでのところで、もう我々の終局の年であり得ただろう。」と述べ、統一直後の旧 DDR 知識人の DDR 時代評価の相違が此処にも見られる。Kormoran もその観点を評価するが、彼は「君の年代学よりも目下私に

関心があるのは、私の誕生日が副大臣のカレンダーに如何に記載されているかである。」[15] と語り、それに対し Horst Schluziak は彼のメモ帳を取り出し、そのカレンダーを Kormoran に手渡し、「時代の批判的同伴者に我々はおめでとうを言います。親愛なる Paul-Martin Kormoran、敬愛する Kormoran、君は今後も」と言いかけるが、後者はそれを中断し、そのメモ帳を開き、「彼は今や批判的な反論を別にして他の事に意義を認めない。」[16] 事を示し、先ず嘗ての女性の弟子が彼の苗字 Kormoran（鵜）にかこつけて、鵜をあげつらって彼を批判した事に言及し、彼はそれにやはり鵜を取り上げて反論した事を語る。DDR 時代に DDR 内で賞賛された人間が統一後同じ賞賛者により批判された現実を語っていると言えよう。ともかく彼は Schluziak が儀礼的にか、または熱烈な喜びから彼の誕生日を記載しているのか知りたがり、本当にメモを見て良いのか尋ね、Grit はもちろん、それは貴方のもので個人的な贈り物だと答える。

（IV）

Grit がメモに表れている Horst の思慮、考え方、共感を賞賛し、彼が当時の自己の立場を擁護したので、各人がその個人的状況に沿って、あらゆる時代に役立たないと見なされる考えには耐えられないと云う事を伝える為に、更に説明を始める雰囲気が漂い、彼女自身にも悩みがあったので、Änne は些か粗暴な振る舞いをして、Grit に夫を誉めるのも良いが、彼を嘗て話題にした時には人々は彼女の事、彼女の影響力も話題にしたのだから、自分を過小評価するなと皮肉とも言える発言をする。Grit が改めて Horst の才能を強調し、争いの兆しが見えたのに、Kormoran が口を挟み、彼女は Horst の才能を見逃してはならないが、聞き逃してならないのもあると述べ、「腹蔵なく話せば、Kormoran のコラムは私の見解によれば、ますます敵の第五列となる。」「脅されて」[17] と言う五年前のメモの記述を問題にする。彼には全く覚えのない事であるからだ。DDR 時代、親しい友人にさえ抱かざるを得なかった政権の或る地位にいた人間の疑心暗鬼を示していると言えよう。彼は五年前の彼の誕生

日当日を思い出し、その時、記録を取られた覚えも脅かされた覚えもない事をHorst に述べ、何故なのか、そしてどうして今になってメモを彼に贈るのか苛立って尋ねる。それを巡って Henkler、Änne、Birchel 婦人の言動が述べられ、Änne が「交易所の雌ライオン」と言う古いあだ名のある Grit に説明を求めようとした時、目立って乱れ、垂れ下がった髪の毛で四十歳程の背の高い男が花を持って訪ねて来る。ひどいズボンを穿き、その後ろからはチェック模様のシャツが飛びだし、カフスの房が目立つのである。牧師の Ackerhauer である。彼は階段を上りテラスに座り、Kormoran に心臓の人工弁の事を尋ね、それを巡って Kant の作品に特徴的なウィットに富んだ話題も出る。話題は更に非常に強力だった党組織がその幹部の損失に耐えられず、もはや強力ではない事、強力な頭脳の持ち主達も巻き添えに会った事、神の事、DDR 政権に協力的であった Ackerhauer の今後の任務にも及ぶ。彼は「私は責任を負います。」とザクセン弁で言い、Änne の微笑みを誘う。

その台詞は彼女の夫 Kormoran が嘗てその言葉を堅く護る時に言葉の有効性に就いて述べた台詞に由来しており、続けて Kormoran がその際に美しい顔と微笑みの関連性に触れ、Änne の場合はそれに当て嵌まらず、彼女の美は真剣な美であり、彼女は確かに激しく美しいが、激しく真剣であると語り、更に彼女の微笑みに就いての Kormoran の考えが述べられる。電話がまた鳴り、Kormoran は戻って来たら大臣の典拠の疑わしい日記の記帳を読む事にすると言い屋内に消える。彼が消えた後、Änne は人工弁の問題のない状況を説明する。牧師の Ackerhauer その機会に立ち上がり、皆に別れを告げ、テラスの階段を下り去り、Kormoran が戻る。彼はイタリアの女優 Claudia Cardinare からの誕生日を祝う社交辞令としての電話であり、彼女が彼とゴルバチョフについて或る事を言ったが、クレムリンでのあの文化会議の際に彼とゴルバチョフが彼女に最大の印象を与えたから理解できると自画自賛めいた解説をする。更に当時の出席者として、Peter Ustinov、Gregory Peck、テレビで当時ピョトール大帝を演じていた Maximilian Schell 等の名が挙げられる。此の辺りは映画を好み、映画俳優達と交流があった Kant 自身の姿を投影して

いる。また Kormoran はゴルバチョフが世界帝国をあれやこれやと論じて駄目にしなかったならばと批判し、「此の男は文学その物で、最近の歴史に於いて恐らく最も悲劇的な像である。」[18] と語り、その男は皇帝になり、語り過ぎ、それが力を使い果たす事に気づいていないと述べる。出版の自由を説教するが、報道の際、彼の姿が印刷されると、彼の額の痣は一度も残らないし、とっくに失われていなかった物は何一つ犠牲にせず、あの様な崩壊を伴う以外には彼は勝利を得られなかったと、厳しい判断を下す。文学と言ったが、「此の人間は運命のオペラに相応しい！　しかしミュージカルに於ける事態に遭遇するだろうと私は恐れる、『ボリス・ゴドノフ』ではなく、『ラマンチャの男』だ。」[19] と言う言は Kant 自身の感慨であり、当を得ている。此の言に対し、一座で『ヘア』だ『キャッツ』だ『オペラの怪人』だ、いや『スーパスター、イエスキリスト』だとの話になる。それぞれ興味深いコメントであるが、それに対し Kormoran はゴルバチョフが世界史の舞台から消えても、クレムリンのゴルバチョフの机のところに長いこと争っていた Dürrenmatt と Frisch が幸せに座っていた事は忘れられぬと述べ、世界の平和を考え、それを作品へ仕上げねばと考えるが、その前に Horst Schluziak に第五列と言う例の記述とそのメモ帳を彼に贈った理由の説明を求める。Horst Schluziak は、それは既に明かだと思えると述べ、一人の在職大臣がその書類の中で政治的敵対行為の様に見えた何かの故に君を脅かしたのだと言い、ロシヤ語を学ぶ事を強制された事がすでに抑圧と見なされる時代にその事が君に救いとならないか！　と主張する。しかし Kormoran は存在しなかった事実の故に納得せず、しばしそこに居た者の間で応答が続く。結局 Horst が脅迫はなかったと述べ、彼のメモ帳中の angedt. と言う略字は angedeutet（暗示されて）で angedroht（脅されて）ではなかったと主張するが、Kormoran は Horst の主張に満足せず、メモ帳の欺瞞的な書き方が誰の為に役立ったのか問題にする。そこで Henkler が彼の為だと Horst Schluziak 元副大臣を指さし、更に自分と Kormoran の為だとも言う。この辺りも当時の DDR の状況を考慮に入れると非常に興味深いものがある。Kormoran は何れにせよ満足せず、嘗てフィンランド旅行の際、領事

館の人間が彼に不十分な説明しか出来なかった例を挙げ、更なる説明を求め、あの時代の存在しなかったが文書で確認された大臣の脅迫が役に立つのは疑わしいと主張し、また暗示的な書き方がどうして Horst にも自分にも当時役に立ったのかも理解しないと述べる。それに対し Grit が「問題は彼に、嘗て現実に存在した社会主義の日々の闘いを堪え忍ばなければならなかった分裂状態の地域を、彼が書物に制約されて信用しなかった事にある」[20] と語る。DDR の作家達の DDR に対する思いと、彼等への政権側一般の嘗ての不信感を語っており、興味深い。

続けて彼女は西側のハンブルク肉屋同業組合の Konkret 紙に書いた彼の記事が「上層指導部に大騒ぎを引き起こし、書記長はぶつぶつ言い、政治局員はがみがみ言い、女性部局長は嘆き、大臣は溜息を就き、Horst が処理しなければならなかった。」[21] と述べ、Horst が彼等の為に如何に尽力しなければならなかったかを伝え、あの時もメモ帳にはきわどいメモを記し、業務報告には別のメモを書き、Kormoran に結論を告げたと公に伝えたので、全ての上層部は事態が処理されると考えたと語る。そして不安を何ら感じず、安心して批判的な仕事が出来た職業を羨み、Horst が如何に彼等を守ってきたか彼等は気づいていないと述べる。彼女は文化批判にも長いこと一つの姿勢があったのだと更に語り、彼女も批判の原則を堅く守る事を示し、何故彼がよりによって超左翼の同業組合紙に書いたのか 今日まで理解できないと話す。それに対し彼は超右翼が彼をクレムリン派と呼んでいると述べ、Schluziak の贈り物の件は未解決だと主張し、Herbert Henkler が何故 Schluziak の為だと言ったのか尋ねる。Henkler は善良な Horst が当時は嗅覚の鋭い犬と見られていたが、今日では批判的市民の為に全てを賭けた鋭い知能の持ち主、正直な男と見られていると応答する。Kormoran は馬鹿げた事だと述べ、批判は以前から政権の酸素吸入器と見られていると語り、彼は事態に即して欠陥を批判してきたと主張し、文書等に対する彼の批判が少ないと、彼が国家の欠陥を問題にした時、彼が国家の生を強く求めなかった事になると語る。そう言う考えが今日彼に対し正当化され、二重のメモによってそれは殆ど撤回されないだろうと述べる。

Kant 自身の統一後の感慨であったのだろう。Kormoran はその様に述べてメモ帳を受け取ろうとしないが、Änne は Horst は間違いなくコピーを持っているから遠慮せずに受け取る様に助言し、彼はもう此の話は止めたと述べ、受け取り、それをどう文学で取り扱ったら良いのか半ば不真面目に問いかける。その上、文化担当副大臣 Horst が誰の為に尽力しているのか、尽力してきたのか問いかけ、何故、我々の幾つかの発言を君は扱き下ろさなかったのかと述べた時、また電話が鳴り、Kormoran は電話の方へ行く。

それを見過ごさなかった Grit が留守番電話はないのかと驚いたように尋ねたのをきっかけに、Änne は此の供給条件の良い地域を提供されて以来、進歩したあれやこれやの文明の利器を何故所有してないのか続け様に尋ねられたのを思い出す。ケーブルテレビとか、ヴィデオとか、CD とか、快適な WC とか、American Express または Visa とか、Fax 或いはコピー機とかである。統一直後に西側世界で流通していた機器の旧 DDR 社会への流入を物語って興味深いシーンである。しかし彼女は Grit に自分の会社の製品提供をするなと語り、留守番電話の応答への不快感を述べ、留守番電話の不必要性を主張する。日頃、無口である彼女の多弁に Herbert Henkler は耳を傾けた後、彼は酒の勢いもあり、彼女はメカニズムに対し屈折した状況にあると語り、彼女が答えようとした時、また一人の男が訪ねて来る。Kormoran の年齢に近い、お祝い様かつファッション風に着飾り、カリカチュア的でもあり、髪型とひげはずっと前から再び流行している十九世紀八十年代の様式で、ロシヤ皇帝やイギリス国王、または遠洋航海の船長が好んだ物である。

彼はテラスの階段を上り皆に挨拶をし、汚水屋シニア（Abwässer senior）と名乗る。息子と共同の汚水処理業者で、都市化されず、公共の汚水処理がなされていない地域に汚水処理の施設を勧めに来たのである。此処で彼は、汚水、水肥、下肥、排泄物に当たる言葉を Abwässer, Jauche, die Fäkalie と表現し、Abwässermann, Jauchemann, Defäkator と自らの職業を呼ぶ。Kant の言葉の遊びと言えよう。一方此処でも、統一直後の西側社会からの資本の急激な流入が示されている。電話から戻ってきた Kormoran に挨拶し、彼と若

干話をしてから御祝い用の多量の花束を彼に渡し去る。その花束を如何に処理するかで、そこに残った者達の間でまた機知に富んだ会話が進展する。

そこへ Änne の妹で Herbert Henkler の妻 Ilse がやって来るのをベランダの隅から見て取った Kormoran は電話が鳴ったと言い、また家の中へ行く。Ilse はジャーナリストでミニスカートを穿き、脚も長く、スタイルの良い眼鏡を掛けた知的な女性である。彼女は皆に挨拶をし、Kormoran の状況を尋ね、彼に関する記事が次の日、新聞に載る情報を得て、彼に知らせるべきかどうか Änne にのみ相談に来て、親密に話し、他の者達から揶揄される。此処で Herbert と Ilse 夫妻の仲の悪さが、彼女の抜け目のない性格と服装への彼の憎悪、彼の午前中からの酩酊への彼女の嫌悪と言う面で明らかになるが、Änne は彼に、彼が兄弟や他の人々に心臓に関する事を話題にしないように要請し、その場を繕う。しかし、隣の Birchel 夫人は先日 Kormoran が自ら心臓(心)(注:ドイツ語では同じ言葉 Herz)に就いて話題にした事を披露する。Ilse は一体誰と Kormoran が電話で長話をしているのか、Änne に尋ねた後に、例の記事の件は黙っていると告げ、彼に御祝いを述べ、現在の状況に絶対的に理想的で相応しい或る贈り物をしたいと小声で言う。口唇から言葉を読み取る事に嘗て精通していた Herbert は贈り物とは何かと考え、しばしの間、出席者の間で推測がされ、結論が出そうになり、Birchel 夫人も関心を抱く。Änne に異議を称えぬように要請し、Ilse が彼に贈ると言うのは携帯用コードレス電話であった。読唇術は国家防衛評議会の中佐であった Herbert が情報関係の仕事に就いていた事を示唆する場面であり、また 1992 年には旧 DDR 市民の間にもコードレス電話が普及した事を語っており、興味深い。

(続く)